
何某電気街某迷走録

野宿お姉さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何某電気街某迷走録

【Nコード】

N9205X

【作者名】

野宿お姉さん

【あらすじ】

メイド喫茶でなにもかも無くし、行くあてもなくナニガシ電気街をさま迷っていた少年ヒノハラマヒロ檜原真洋は、突如現れた謎の学ラン紳士にツッコミを浴び心停止する。そうしてその後目覚めた場所は――。青春できない彼らが青春するための、カオスティック青春ファンタジー。

1, 2 邂逅

1

帰り際もらった初入店記念写真の裏には

またきてにゃん

と、書かれていた。

檜原真洋は、もう二度と来てやるかにゃん、あんな小さいオムライスに千円以上徴収するとかどこの闇市やねんにゃあ！ ふざけんにゃあ！ と叫びながらその写真を地面に叩きつけようとしたがやつぱり止めて、歩行者天国の中を再び歩き始めた。

2

暗く深い、谷底を這っているような心境だ。

ビル群のただ中。生ぬるい空気のたまった電気街。これだけ密集しているのに、肩さえ触れ合わずすれ違っていく人々。一瞬で数百人とすれ違い、また一瞬、また一瞬と一期一会が消費されていく。

そんな人々を横目で見ながら、彼は鬱屈した心をぶくぶくと膨張させ、今にも破裂してしまいそうだった。

理由も分からないフラストレーションが、彼の心をそうさせていた。

現代という、この先どうなるのか全くよく分からない時代への不安。友人一人作ることができず、孤独にならざるを得ない現状への不満。

彼はそんな不満を狭い心の中に無理やり詰め込み押し込み、しかし発散させることはなかなかできない。このままではいずれ爆発してしまうだろう。それは周りの人を巻き込みながらの爆死。うぎゃああああとか言いながらナイフを振りかざし走り回り、警察に捕まる前に自殺する。人間として最悪の結末。ふとそんな映像が彼の頭をよぎった。

田舎町を脱出してこの電気街へ来たのはいい。だが目的がない――そう気づいたのは、街を移動する恐ろしいほどの人だかりを見てからだ。ああ何のためにここまで来たのか、自分にもさっぱり分からない。別に熱中するアニメもないし、メイド喫茶へ行きたいとも思わない。じゃあ何で来たんねん、と自らにツッコむ。何でだろうね、と力なく答える。

とりあえずメイド喫茶へ足を踏み入れてはみたが、予想通り緊張しすぎて楽しめなかった。

たとえば「いらっしやいませご主人様」と言われた時、人はどう反応すれば良いのだろうか。店の扉の前でそんなことを小一時間悩んだあげく、彼が下した判断は「できるだけ慣れ慣れしく応える」ということだった。

むろん、その判断に行きつくまで彼は様々な意見分別と論理的思考をたどってきたのだが、それについては省くことにする。

彼は扉を開いた。

「いらっしやいませ、ご主人様！」

並ぶメイドの威圧感。

できるだけ馴れ馴れしくできるだけ慣れ慣れしく。そう考えた彼は何を思ったか右手を挙げた。友人に、よっ、と声をかける時のごとく。あとはセリフだあとはセリフだ、と彼は焦る。次第に薄れていく意識。混濁する思考。今から何が起こるのか期待しているようなメイドさんたちの視線。そりゃ彼が右手を挙げてしまったのだから、メイドさんは「今からお客さん何かすんのかな」と待機してしまふ。

でも彼は何を言うのか考えてなかった。考えてればよかった。でも何も考えてなかった。

舌が勝手に、SとYとUを混ぜ合わせたような音を出してしまった。

焦った。彼は非常かつ異常かつ尋常なく焦った。

メイドさんたちもお客様の緊張を察したようで、目の色に困惑を混じらせている。

もう、突っ切るしかない――

「しゅ」

彼はそう思い、声を、声を、

「しゅ、しゅっ……」

吐き出そうとすばまる喉を一気に解放したら脳の中の混沌が口から一気に垂れ流された。

「しゅ、しゅっしゅぽおおおおお！」

彼は頭が真っ白になった。

その後のことを、彼はよく覚えていない。

ただ、オムライスの値段の高さは異常だったと思う。

それにしてもいろんな人がいるもんだ、と歩行者天国を歩きながら彼は思う。

「うふーん、我的に言うところたんの萌えポイントは小動物のなかに本能にありのままに従っているといえますか、人間らしさを感じさせない小動物のエロスといえますか」とか言ってる見るからにオタクっぽいのもいるし、「まんぼう」と書かれたTシャツを着て、道行く人々を木刀できりきりまいしながら「介錯！ はらきーり！ すきやき！」と叫ぶ外国人もいたりする。

そんな変人ばかりかと思えば、一歩進むたびに最敬礼を行うサラリーマン。親子連れに普通の学生。たぶん主婦。じいさん。ばあさん。猫、メイド。

彼はそんな人々を、神仏が天空から眺めるような目つきで見ている。口元には微かな笑みを浮かべている。アルカイク・スマイルである。これこそがアルカイク・スマイルである。さきほど感じたあまりの羞恥に、彼は悟りを開きつつあったのだ。

世界はこんなにも素敵なんだね。

いろんな人がいる。みんなちがってみんないいなあ。にんげんだもの。なんでみんなあんなに素敵なんだろうなあ。ここに人たちはみんな輝いているなあ。なんでみんなあんなに輝いているんだろう。

彼はそう考えている内、泣きだしそうになった。ぼやけた騒音で頭の中がいっぱいになる。ふいに一つの考えが彼の頭を突いた。

そうだ——みんな、何かに熱中しているのだ。

アニメ。PCパーツかもしれない。アイドルか、それとも薄い本だろうか。

とにかく、ここへ辿りつく人には各々の目的がある。みなそれぞれの目的を持ってここへ、様々な文化の集約する、まさに闇市のようにゴテゴテしたこの場所へやってくる。

そうじゃなければ、なんでこんな場所くるん、といった感じである。わざわざストレスを感じるために来るのか。群集に囲まれることによって快感を覚える人ならまだしも。人間観察のためならこの場所はうってつけかもしれないが。

だがしかし、彼にはそういった性癖があるわけでもないし、そういう趣味も持ち合わせてもいなかった。

そう、彼には趣味がない。

熱中することが何もない。

ゆえに彼は泣きそうだった。

自分が果てしなくみじめな存在に思えてきて。

——だから彼はいち早く、ここから逃げ出すことに決めた。

彼はさっそく駅へ向かうため、出発前にあらかじめ印刷しておいた地図を取り出そうと、背中のリュックに手をかけようとした。結局何も詰めるものがなかったリュックはとても軽い。まるで何にも背負っていないみたいだ。

次の瞬間、彼の背中から冷や汗がぶわっとふきだした。

あれ、ほんとになんも背負っていないんじゃないか、と思ったからだ。

第六感以前に五感の全てが警鐘を鳴らす。あまりの背中 of 軽さに、大空へ飛んで行ってしまいたいそうだった。身体ではなく、意識の方が。精神体が。幽体が。魂が。

彼はシュレディンガーの猫作戦をとることにした。自分が背中を
チェックさえしなければ、そこにリュックの存在があるかどうか
なんて分からない。

そう、あるかもしれないのだ。そこにリュックが存在するかも
しれないのだ。リュックの中には地図の他、携帯電話やら財布やら
旅に欠かせぬものがたくさん入っていて、彼はそれらを駆使して無
事田舎に帰ることができるのだ。やったね。

しかしよくよく考えればリュックサックまたはバックパックある
いは背囊というものには肩紐があった。それを肩にかけることに
よって、我々は荷物を入れる袋部分を背負うことができるのだった。

彼は自らの二の腕あたりを見てしまった。

そこには何もなかった。

彼は爆死した。

2

歩行者天国が終了し幾時間。ナニガシ電気街はまさに電気
の街といった様相で、目の奥を刺すまばゆい灯光を全身に帯び
始めていた。四車線道路を走る車はまばらだ。架橋の上を弾丸
のように電車が飛び交い、人々は相も変わらず、林立するビル
ディングに吸い込まれたり吐き出されたりを繰り返している。
そんな中、真洋一人だけが建物に入ろうにも入れず、ただひた
すら街中をぐるぐるぐる回っていた。

リュックはどこだ。

リュックがあるかもしれないあのメイド喫茶はどこにある。

記憶だけを頼りに彼はさまよった。確か結構入り組んだ道の途中にあったはずと思ったので、とりあえず入り組んでいそうな道に入ってみた。

道に迷った。

気がつけば駅の方角さえもよく分からなくなっていた。

しかも、何かぬめぬめした空気感の界限に立ち入ってしまったようだった。路面は狭く、歩く人種は大概がおっさん。道を圧迫するように両側に並ぶ店の外装は、都会というより、祭りの屋台に似た猥雑な雰囲気放っている。時々洒落た外装を見かけると思ったら、狭い入口の前に「60分〇〇円」という意味深な表示を載せた看板がピカピカ光っていた。

都会のあんなところやこんなところを見せつけられているような感じだ。でも彼はちっともドキドキしなかった。割とどうでもよかった。

そんなことより腹が減っていた。

性欲より食欲を優先するんだな人間って、と思いながらも足取りが危うい。五時間そこらぶっ続けで歩いているせいで、彼の膝は笑いに笑い転げていた。彼は全く気付いていないが、ハアハア言いながら脚をぶるぶるさせて歩く彼の姿は、外から見るとまるで性欲の

亡者だった。

猫耳をつけたおっさんメイドも引いていた。あいつどんだけ飢え
とるんねん。

「ちよいちよいそのお兄さん」

何か背後から男性の声が聞こえたような気がしたが、幻聴だと思
って彼は振り返らなかった。

次の瞬間、「どーん！」という声と共に、右目に何か鋭いものが
突き刺さった。

反射的に目を閉じたため直接的なダメージは避けられたが、まぶ
たの上から受けた衝撃で思わず眼球がこぼれ落ちそうになった。

ぐおおおと悶え、右目を両手で押さえながら彼は膝をつく。

「なんで無視するんや！」

降りかかってくる声に頭を上げると、そこには学ランに身を包み、
黒い山高帽をかぶった紳士様の人物が、自分に向かって指を差して
いるのだった。どうやらその指で目を突かれたらしかった。

幻覚だろうと思って彼は立ち上がり、再び歩き出す。

「なんで無視するんや！」

再度人差し指が彼の目を襲ったが、彼はうつむくことによってその攻撃を回避した。

謎の紳士は勢いよくやりすぎたため、彼の頭で指を突き、ぐおおとおおと悶えながら地に膝をついた。

ところでその時の彼はとても焦っていた。幻聴でも幻覚でもないとうやうやく気づいたのだ。それはつまり他の人を無視したということで、それはとても罪深いことで、冷や汗から身体じゅうが、じゃなくて、身体中が冷や汗から、じゃなくて、とにかくものすごく焦ってそして頭の中が真っ白になった。彼はどもりながら叫んだ。

「ばっばばばばばすみません！」

「なんでそない『ば』を連呼すんねん！」

関西弁の学ラン紳士は驚くほど俊敏な動きで立ち上がり、彼の胸に手の甲を叩きつけ——つまりツツコミを繰り返した。それは恐るべき速度だった。立ち上がる仕草を誰も目に入れることはできなかった。まるで瞬間移動したかのように素早く、そして鋭いツツコミだった。

彼は心停止に陥った。

3, 4 蘇生

3

真洋は暗い意識の奥底で夢を見ていた。

昔——とはいっても幼稚園から小学生にかけてのころだから十数年前、彼にはいわゆる幼なじみというものがいて、毎日その娘と一緒に楽しく遊んでいた。夢の正体は、その頃の記憶だった。

でも彼が目を覚ました時、それは夢の中でできごとと化してしまっ
った。

そして夢の中でできごとは、いずれ頭の中から消え去ってしまう。

「気づいたか」

そう誰かに声をかけられたときには、すでに消えてしまっていた。

ピッ、ピッ、と同じ調子で響く甲高い電子音と、換気扇のせわしく回る音が彼の耳の中に入ってきた。彼は上半身を起こし、辺りを見回した。

「店の更衣室だ。ウチのモンが何かやかしまったみたいだな、申し訳ない。代わりと言ってはなんだが、お前を蘇生させてもらっ

た。こっちも金がないんでな、すまないが慰謝料は払えねえ。命あっての物種つつうわけで、勘弁してやってくれ」

店の更衣室らしいその部屋は四畳半より少し広いくらいの空間で、学校にある部室のような土臭い雰囲気を持っていた。

いくつかの錆びついたロッカーが片面の壁伝いに並んでいる。それに目を沿わせていくと出入口の戸があり、そのすぐ隣には、戸の面積よりか少し小さな冷蔵庫が居座る。その上にレンジ。その隣に、

小さな鏡と陶器の流し台。鏡は天井の蛍光灯と、反対向きになった壁掛け時計、そして部屋にいる二人の姿を写す。窓はないようだ。

ロッカーの反対側の壁には、従業員の書いたらしい一筆が、小学校の教室の後ろに掲げられる児童の習字作品みたいに飾られていた。みんな一律に、こう書いていた。

青春

彼はそんな更衣室に不自然に置いてあるベッドの上で横たわっている。そんな更衣室に不自然に設置されている医療機器に繋がれながら。胸のあたりには、たくさんの電極が貼りつけられていた。上着は脱がされて、枕元に畳んである。

男が何か話しかけようとしたとき、突然彼の腹の虫が大きく鳴いた。

「おお。まあ、蘇ったら腹も空くわな。ちょっと待ってろ。確か弁当があったはず」

冷蔵庫の中からコンビニ弁当を取り出してレンジの中へ入れる男の様子を、彼は黙って見ていた。男は謎のツツコミ野郎と同じ、全身黒ずくめの格好をしている。山高帽に学ランという奇妙な組み合わせ。足には黒い革靴——ローファーかもしれない。

しかしさっきのあいっよりはかなり背が高い。学校でも背が高い方に類される彼よりも、もう頭一つ分高そうだった。

「役割上、」

男は彼に割り箸を手渡しながら言う。

「お前の身体を調べさせてもらったんだが……お前、何も持ってないんだな。身の上を示すもの、なんか隠し持っていたりとかしないか。若い顔をしている。まだ学生だろ？」

彼は割り箸を受け取ってうつむいた。なんで学生がこんな裏道に来てるんだ、と遠回しに責められているような気がしたのだ。すると男が心を読み取ったように言った。

「別に責めてるんじゃないよ。学生がこんなところについてたって、別段俺は気にしない。むしろ学生はそれぐらい好奇心旺盛なくらいが丁度いいのさ。それよりだな、時間が時間だからな。……つまり親御さんが心配してるだろ、って話だよ」

チン、とレンジの動作音が止んだ。まあ、そんなしょうもない話は飯の後でいいか、と男はレンジから取り出したあつあつの弁当を

彼に差し出した。真洋は頭を下げて、少しためらってからそれを受け取る

米粒に飴色のタレの染むスタミナ丼。立ち上る湯気が孕む脂の匂い、タレの香ばしい匂い。彼はもう一度腹を鳴らす。唾液をぐくりと飲みこんだ後、

「いただきます」

米粒を一気に口の中へかきこんだ。

彼が弁当を食べ終わった後、時計の針はレの字を左右逆にしたように見えた。

冬が明けたと言っても、夜はやはり冷え込む。暖房などはこの部屋にはないようだった。許可をもらって電極を外し、素早い動作で上着をかぶる。

「あ、ありがとうございました」

弁当の容器をゴミ箱（ベッドの足元にあっただらしい）へ押し込む男に、彼は頭を下げた。意識がぼやけていたおかげか、緊張せずに喋れた。男は「かまわんかまわん」と手を振り答え、ベッドの下から取り出した折り畳み式の椅子を開き、そこへどっかり腰をかけた。

「まあお前にも訊ねたいことはたくさんあると思うんだが、それは後から分かってくるだろうし、まずはこっちから訊ねさせてもらうとするよ。お前、電気街の住民、ではないんだよな」

男は鋭い目をして無精髭を顎に散らしてはいるが、その反面口調は優しい。学ランを着ているせいかな、一昔前の頼れる番長のような存在にも見える。

「ああ、はい。電車で……電車で……ここまで……」

「なるほど。じゃあ都内に住んでんのか？」

「あいや。あいやあ、隣の、とこですかね」

「隣」

「はい隣」

実際住んでいた県は隣の隣の隣だったのだが、彼は驚かれるのを嫌がってウソをついてしまった。その他には別に何の思惑もない。

幸い、男は「隣」についての全てを受け流してくれた。彼のおどおどした様子を見て、これはワケありだなと踏んだのだ。

「じゃあ持ち物はどうした。最低限財布とか。隣からだったら、まあ位置にもよるが、結構金かったんじゃないか？ まさか無銭乗車とかやってのけたんじゃないなあ。いやまあ仮に無銭乗車できたとしてだ。金もないのにここ来て何やってたんだ？ バイトでもやってるのか」

「やややあ。いあはあ」

彼は斜め上を向いて意味不明な言葉を紡ぎながら、ジーパンの後

ろポケットを探った。

あった。四つ折りになった紙切れを取り出して、開いていく。それはメイド喫茶で撮ってもらった写真だった。十字の折り皺がついているその中心に、彼は何とも微妙な笑みを浮かべながら、猫のポーズをとる二人のメイドさんに挟まれている。

「ああ、それな」

男は頭を軽くかきながら言った。

「触れられるの嫌かなと思ってあえて触れなかったんだが、ああ、それは見させてもらった。そんなサービスがあるんだな。喫茶行くために来たのか。まあ名物だしなあ、ここの」

「あいや」

彼は「メイド喫茶に行くために電気街へ来たんじゃない」と言うかどうか迷った。でもそれを口にするに「じゃあなんで来たの」という問いに逆戻りしてしまうので、彼はそれ以上何も言わなかった。代わりに、そうだ、と思い出す。

「たぶん、なんですけど、そこに荷物、あつ、リュック背負ってきてたんですけども、たぶん」

「うん」

「そこに忘れて来ちゃったみたいなんですよね、荷物あつリュック。たぶん。たぶん」

「うんうん」

「そ、そこに財布とか……財布、えーと財布、とかケータイ、とか、入ってて」

「……つまり、いろんなものが詰まっていたリュックサックを、店内に放置したまま、気づかず外へ出てしまったと」

「はい、そうです。たぶん」

少しの沈黙。

直後、いきなり男が「どうわははははは」といった豪快な笑いを口から吐き出し始めた。腹を抱えて椅子から落ちないように前のめりになって、ベッドの掛布団に額をついて。彼は「笑い事じゃないですよ」と思ったが口には出さない。

それに、そう思うには思ったが、不思議と腹はたたなかった。そんなことより、自分の失敗談でこうやって笑ってくれているのが嬉しかった。

「背中にリュック、店出るとき気づかなかったのか、背負ってないの、だははは」

「だって、だって、う、うへへへ」

「まあ、まあそんなこともあるよな、はは、あるよあるよそういうことさ。いやすまん。うん、気づかないときは全然気づかないよな」

男は笑い終わると、なるほどなあ、と姿勢を正して腕を組んだ。

「実はメイド喫茶には行ったことがないんで、俺にはあんまりよく分からないんだが。まあサービス業なのはウチの店と変わらないだろうし、大事な大事なお客様の忘れ物ということで預かってくれるだろうな。そこは安心していい。必ず戻ってくるさ」

「僕もそう思って、店捜してたんですけど、迷って……ああ、地図とかもそこに入れてて、たんです」

「そうしてたどり着いたのがここで良かっただろ。ははは、それであいつのツツコミ受けたって順路だ。何をボケたのか分からんが、あいつのツツコミは殺人的でな、それでここに、これ、」

男はベッドの頭側近くに設置されている医療器具を、手のひらでぽんぽんと軽く叩いた。

「除細動器と心電図無理くり組み合わせたようなモンが置いてあるってわけよ。ナニガシ電気街はジャンクパーツの山みたいなもんでな、腕さえあれば何でも作れる。こいつはウチの従業員に作ってもらった。いろいろ危ないところ探れば、小さい爆弾なんかも作れるかもなあ」

彼は、じゃあ僕心臓止まってたのか、と軽く驚愕しながら、というかツツコミで心停止ってどういうことだよ、とツツコミたくなる気分で、というかそんな危険な従業員売り子にすんなよというかそんな理由でこんな機械まで作ったのかよ、と思いつつもその全てを心の中に飲みこんで、苦笑いを浮かべていた。

「お前は案外スツと状況を受け入れられるタイプなんだな」

男が突然そう言ったので、彼は一瞬ドキリとした。男は彼の訝し

がるような表情を見て、早口で進める。

「いやな、度々ここにはお前みたいに倒れたやつが運ばれてくるんだが、揃いも揃って『なあなあ俺の身に何が起こったんだよ』とか言ってパニックじみてるんだよ。まあ、それが普通なのかもしれないが、お前はこうやって、やけに自然体のままでここにいる。珍しいやつだなあって思ったわけよ」

彼は「そ、ほ、そうですか？」とできるだけ明るい声で言ったが、しかし心中は暗く沈んでいた。

それは受け入れてるわけじゃない。我慢しているのだ。溜め込んでいるのだ。それに慣れているだけだ。そう、心の中で呟いた。

「でも、」

男が少し語気を強めて言ったので、彼はうつむき加減になっていた顔を上げた。

「多少の疑問は持っていた方がいい。ツツコミだよ、ツツコミ。なんで〇〇やねんっていう。参考程度に覚えておくといいかもな。社会は、まあ企業によるが、受け入れる人材よりもツツコミ人材を欲しがってる。受け入れるのが悪いってわけじゃないが……まあ社会の傾向だな。受け入れてばかりなやつは良くてサラリーマン行き、か、保守的な社長がいつまでも玉座に居座り続けてる、ロクでもない企業だよ」

男は意味深に、にかつと表情をほころばせて彼の顔を見た。

そしてゆっくり口を開いたあと、こう言った。

「お前、ツツコミニスト協会にならねえか」

「つ、」

「ツツコミニスト協会に入ったらそういうことにもならないぞ。ツツコミスキルを磨くんだよ。ツツコミスキルが上がれば上がるほど自由かつ優秀な企業に入社できて、独創的な意見、アイデアをもつてして社会に貢献することができる。上手くいけばそれなりの役職を得ることができ、それなりの収入でそれなりの生活をすることができる。まさに夢のような日々だ。どうだ、入らないか」

「う。」

「日本ツツコミニスト協会は全く新しい形態の団体です。ここであらかじめ私たちは自分たちのことを『宗教法人』と名乗りますが、これは便宜上そういうものに属しているというだけで、その実、怪しい宗教臭の全くしない、健全かつ有意義な団体なのです。素晴らしい社会を作るための素晴らしい人材による素晴らしい団体。それが一言でいう日本ツツコミニスト協会です。しかしやはり一言では日本ツツコミニスト協会の素晴らしい点は説明できません。限界があります。詳しいことは〇〇ビル二階、ツツコミニスト協会ツツコミ道場本部にて初級研修会を行っておりますので、というわけで早速明日一緒に行こうじゃないか」

彼は本気で焦った。相手が見知らぬ土地の見知らぬ人であることをすっかり忘れていた。断らないとヤバいというのは自分でも分かっている。しかし頭の中で断り文句が上手く組み立てられない。言葉の断片だけが口からこぼれ出る。

「おっ、おっびゅ、おびゅびゅ」

男の不気味なやつきがだんだんと迫ってくる。

「あっひひ、そっそそそそ、そういうのは、ちよと、ちよっと」

身振りで何とか拒否を示そうとする。だが男の表情は、中空に染みがついたみたいに変わらない。

次の瞬間、男は「どうわははははは」とまたも大きな声をあげて笑い始めた。

彼はきよとしたまま、何も言えず男が笑うのをただ見ていた。男は、今度はやじろべえのように頭を前後左右に揺さぶりながら腹をよじらせている。やがてベッドに手をつき、ふう、と息をついて彼の顔を見る。

「すまんすまん、うはは、冗談だよ、冗談。うっく、ういひひひ。でも、ツツコミの重要性が分かっただろ、はは。何もかもありのままに受け入れすぎて信じちまったら、こういう目にも遭っははは、遭う。ああこいつならいけるな、って思わせちまうんだ、相手にさ。宗教の輩だけじゃなく、もっと他にもいろいろ。」

ああでもたぶん、お前は受け入れてるんじゃないのかもな。さっき断りかけてたし。うん、確かにツツコミというのは勇気がある。文句言うのとはほとんど一緒だからさ。でもな、ツツコまれて嫌な気がするやつなんて、案外少ないもんだ。それがただの文句じゃない限りは、な。ツツコまれて嫌な気がするやつなんてのは、そいつ自

体が嫌な奴だと思え。それか、こっちのツツコミがただの文句に変わってたか」

男は「ところで、」と一旦言葉を切り、椅子から立ち上がった。

「トイレ」

彼は気づいていた。これがただの言葉でないことに。

——これは“ボケ”だ。そしてボケには、渾身の力を込めてツツこまなければならぬ。何事も恐れず、立ち向かう勇気をもって。

彼は腹から声を吐き出した。緊張は、やはり襲ってきた。喉を締め付ける縄のような緊張。

だが彼はそれを大仰な動きで振りほどいた。右手を鞭のようにしならせ、背を向けた男の腰骨めがけて力を込めた。

「トイレってどこにあるんやねん！」

スパアァン——と、彼の右手が男の背中にめりこんだ。

沈黙が、室内を覆った。

冷蔵庫の低いうなり声が続いていた。

換気扇は、時折カラカラと音をたてつつも回り続けていた。どこから入ってきたのか、一匹の蛾が蛍光灯の周りを枯れ木の葉のようにかさかさ飛び回っていた。

「君は」

沈黙を破って、男が少し振り返る。

そして、ツツコんだモーシヨンのまま固まっている彼を見る。

「君は……ボケ向きだな」

4

薄いベージュの陶器の表面に、黄金水が砕け散る。男二人の堂々とした立ち姿がその前に並ぶ。薄汚れた青タイルの空間。若干黄ばんだアイボリーの天井。何とも言えない生臭い匂い。

二人はじっと、銀色に光る流水ボタンを見つめながら、排出の快感に浸っていた。

「お前もずっと小便我慢してたんだなあ。うん。なら、あのツツコミはある意味では的確なものだったのかもしれない……」

「こ、渾身の、一撃でした……」

真洋が先にボタンを押し、チャックを上げ、手を洗う。

男の黄金水は止まらない。

うははっ、と男が笑いをもらした。

「なんか全然、止まらないんだが」

男は笑いに肩を震わせながら黄金水を垂れ流していた。なんかよく分からんところでよく笑う人だな、と思いながら彼も苦笑する。そのあと、連れションなんて久しぶりですよ、という言葉がふつと頭を横切った。

しかし彼はそれを言わずにおいた。友人のいないことがバレるのを、恐れたからだ。

「なあ、お前って学生なんだよな」

笑い終えた男は小便も終えたようで、水気を切るように腰を小さく振りながら言った。

「あ、はい。高二、高校二年生です」

男はボタンを押す。陶器に付着した汚れや匂いを水のボールが洗い流していく。

「じゃあ、今の時期は春休みか。だよな。えー今日何日だっけ。えー、三月二十三が木曜で今日土曜で二十五か」

「はい、ちょうど今日から始まりましたね」

「やっぱな」

男が洗面所に近づいてきたので、彼はすぐ隣の扉近くへ避けた。そのトイレには洗面台が一つしか設置されていなかった。男は蛇口をひねると流水の中で手をこすり合わせ、鏡を見る。彼はその鏡に映る男の首あたりを見ている。

「春休みの期間中」

男は水を止め、手についた水をパツ、パツと二度払った。鏡の中で男と彼の目が合った。

「ウチで働いてみねえか」

えっ、と声をあげる彼に男が振り向く。「どうだ？」と念を押すように言って、ポケットから出した青いハンカチで手を拭いた。使うか？　と言って差し出されたハンカチを受け取り、彼も手を拭く。手を拭きながら考える。少し湿った、薄い生地の手ハンカチ。そして声を口に出す。

「なんでウチで働いてみねえかになるんねん！」

「ボケじゃねえよ」

言ったあと男は、うはは、と一小節分の笑い声をあげた。

「ああ、質問にもなってるのな、それ。ほうほう、なるほどな。うん。一つには、やっぱお前が面白いからだよ。ああいや、正しく言うとか、面白そう、かな。つまり気になってるってこと。そういえば、名前聞いてなかったな、なんていうんだ？」

「えっと……檜原真洋、っています」

「ヒノハラ、マヒロ。オーケー。じゃあマヒロ。俺のことは店長と呼んでくれ。何と言ったってこの店の長だからな。まあ、もし働いてくれるんなら、の話だが」

「でも、この店って……その、風俗とかじゃ」

「それなら心配ご無用だ。というか、このトイレ来るまでに大体分かっただろ。ここは風俗じゃないって。じゃあなんなのかって話だが、それは働き始めてからはつきりと分かる」

言われてみれば確かにそうだった。彼は思い出す。

控室からここまでの道のりは、一本の廊下によって結ばれていた。二人は股を押さえつつの急ぎ足でここまで来たから周りを見る余裕なんてほとんどなかったのだが、その廊下の印象は、彼の網膜に強く焼き付いている。

更衣室から出てすぐ彼の目を射した、窓からの日の光。その木枠の窓は列車の中を思わせるような等間隔で廊下に暖かい光をもたらし、同時に豊かな木々の緑色を映していた。その向こうには真っ青な空とグラウンドが広がっているようにも見えた。

ここが本当に、さっきまでいた場所と同じところなのか。彼は思わず後ろを振り向く。

そこには下部に赤い十字の描かれた、木の戸がある。開けるとガ

ラガラ音をたてる、木の戸。

保健室

そう書かれた小さな吊り看板が、戸の上で小刻みに揺れていた。

すぐに男が「こっちだ」と駆け出したので注視することも驚くこともできなかったが、走っている間にも彼の目には様々なものが頭に貼りついてはがれなかった。

職員室の吊り看板。時間割変更の書かれたホワイトボード。その右下の落書き。校長室の重々しそうな扉。走ると響く床の音。木のやさしい匂い――。

そこはまるで、校舎だった。

いや、「まるで」ではない。

そこは、確かに、ちょっと古めかしい、だけど懐かしい感じがする校舎だった。

「二つ目は」

男の声を聞いて、彼ははっと目が覚めるような心地になる。

「……まあ、働いてみたら分かる。言葉にして言っておくと、きっと、いい経験になる。俺はそう思う。どんな経験するかは分からない。三つ目は実は従業員が少ないってことと、四つ目はマヒロ自

身の寝泊りする場所の問題と、五つ目はいろいろと……と続いているくわけなんだが、結論から言うところ、働いてほしいんだ。とてもな。もちろん、家の都合とかがあるだろうから、決めるのはリュックが見つかって、親御さんと連絡がとれて、そのあとでいい――」

続く言葉を耳に入れながら、彼は心の中でどうするか考えていた。彼にいつものような焦りはほとんどなかった。それほどこの男が、彼の心に近づいてきたということだった。

男は彼の心に取り入っただけなのかもしれないし、寄り添ったのかもしれない。それは分からない。もしかしたら、本当に宗教勧誘の人間なのかもしれない。そういう疑念もあった。でもそれは、先に踏み込んでみなければ分からないことだった。

いつものくそ真面目な彼なら、校則でバイトは禁止されている、などと言って考えるまでもなく断っただろう。それに、働くのが怖い、という感情もあった。恐怖。人間に対する恐怖。他人と接することに対する恐怖。そんな恐怖たちが彼の前進を引き止めただろう。

でも、今回は不思議とそんな恐怖が薄れていた。そっと力を加えるだけで、そんな恐怖も簡単に破けそうな気がした。

男の親身のせいだろうか。

それもある。こんなに誰かに必要とされたのは、久しぶりのことだったのだ。その確信を押しつけるように、仮面をかぶっているんじゃないだろうかという疑心が沸く。それをあの豪快な笑いがかき消してくれる。彼の緊張を優しく解きほぐしてくれた、見下げられているような感じない、不思議と温かな笑い方。

唐突な助言めいたものには少し戸惑ったが、そんな風に時折見える不器用さが親近感に繋がった。自分と男には、どこか共通項があるような気がした。

信じてみよう。そう思うようになっていた。

そして、何より彼自身が変わりたかったのだ。歩く人々を見て感じた強い劣等感。自分には何もない。自分には夢も、希望も、情熱もない。そんな自分から、抜け出したかったのだ。

思い出した、田舎を出ようと決めたときのこと。

何の目的もなくこのナニガシ電気街まで来たんじゃない。

自分を変えるため、ここに來たんだ。

自分を変えろという目的を果たすため、ここに辿りついたんだ。

「店長」

彼は言った。男――いや、店長の目を食い入るように見つめた。

「この店で、働かせてください」

お願いします、と深く頭を下げた。

店長は帽子のつばを手に添えて、表情を隠すように下を向く。く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9205x/>

何某電気街某迷走録

2011年11月12日10時22分発行